

Title	ヌルハチ時代のヒヤ制：清初侍衛考序説
Author(s)	杉山, 清彦
Citation	東洋史研究 (2003), 62(1): 97-136
Issue Date	2003-06-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/155509
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

ヌルハチ時代のヒヤ制

——清初侍衛考序説——

杉 山 清 彦

序 論

第一節 ヌルハチのヒヤ集團

第二節 ヒヤの職務と特徴

第三節 ヒヤ制の淵源

結 語

序 論

1 問題の所在

一五八三(明・萬曆一一)年、建州女直すなわちマンジュ Manju (滿洲)五部の覇權爭奪戰に名乗りをあげたヌルハチ Nurlaci (一五五九—一六二六)は、一代のうちに全ジュシェン Jusen (女眞・女直)諸部を統一、その覇業は第二代ホンタイジ Hong Taiji (位一六二六—四三)へと引き繼がれていく。この所謂入關前の時代における支配體制は、ヌルハチと同母弟シユルガチ Surgaci との二巨頭體制(一六〇九)、五大臣制の整備(一六一一)、長子チュエン Cuyeng の執政・失脚(一六二二—二三)を経て、最終的に八旗制(一六二五頃までに成立)へと歸着する。ゆえにこれまでの清初政治史・制度史

研究が、各時期の権力構造と職位、八旗制の成立過程とその内部構造、そして一門諸王・重臣たちの権力抗争、といった諸問題の解明を中心に展開されてきたことは、異とするに足りないであろう。

だが、問題をより廣く捉えて、國家形成過程一般、権力編成一般の問題として當該期を見直したとき、從來の研究では君主の身邊に仕える人々の姿が稀薄であることに氣づかされる。そもそもいかなる國家においても、君主の周圍には側近・警護・家内業務等に從事する集團が存在するものであり、清もまた例外ではないはずである。就中、霸權鬭争の中で権力を形成してきたヌルハチにとっては、その手足となり、あるいは劍とも楯ともなる側近集團、謂わば親衛隊がまずもって不可欠であろう。では、ヌルハチの側近集團・親衛組織とは、いかなるものであつたであろうか。これが、本稿の主題となるヒヤ^{ヒヤ}（轄・蝦）である。

ヒヤとは、モンゴル語^{ヒヤ}と同義で入關後に侍衛と漢譯され、後の定制における皇帝の親衛組織として知られている。しかしながら、これまでヒヤ侍衛制についての研究は極めて乏しく、ゆえにまずはその草創期、ヌルハチ時代の實證研究が求められているのが現状なのである。そこで本稿では、基礎的作業として以下の目標を設定する。第一に、そもそも未だ明らかでないヌルハチの親衛集團の姿を、實例に即して明らかにすること。第二に、それら親衛集團の職務を復元・分析し、その特徴を闡明すること。そして第三に、淵源についていささかなりとも見通しを提出すること。これにより、マンジュー^{グルン}大清國勃興期の権力中樞の構造とその特質に光を當てることができるはずである。

2 研究史と史料

ヌルハチは、自ら創設した八旗制下において正黃・鑲黃二旗を親率するとともに、他の兩紅・兩白・兩藍六旗には、自身と亡弟シユルガチとの嫡子・嫡孫を旗王として分封して支配せしめた。政權傘下のあらゆる人々はニル^{ニル}（牛录）に組織されていづれかの旗王に分與され、その支配を受けていたから、それらの總體である八旗とは、入關前においては國

家そのものであったといえるであろう。他方、行政・軍事上の管轄體系としては、旗すなわちグサ *gasa* (固山) を頂點とするグサー・ジャラン *jalan* (甲喇) — ニルという階層組織體系が布かれ、グサー・メイレン *meiren* — ジャラン — ニルの各エジェン *jen* と稱する八旗官が任じられた。さらにこれとは別個に、總兵官 — 副將 — 遊撃 — 備禦からなる世職制という位階制が存した (松浦茂一九八四)。八旗制下においては、大臣は通常、八旗官に任じられて當該單位を管轄するとともに功績に應じて授けられた世職を帶び、各自の屬する旗王を主君と仰いでいたのである。

右の如き制度下、八旗の主力部隊は各ニルから抽出される甲士によって編成され、各級の八旗官が指揮・管轄した。これに對し親衛隊・近衛部隊と目される集團には、ヒヤとバヤラ *bayara* (擺牙喇) の二種が存在する。バヤラは甲士中から選拔される精兵をいい、後に護軍と漢稱される。『大清會典』の規定によれば、入關後完成された皇帝親衛軍は、上三旗 (皇帝直屬の鑲黃・正黃・正白旗) から選拔され領侍衛內大臣によって率いられる領侍衛府 (侍衛處・親軍營) と、八旗各旗から選拔され前鋒統領によって指揮される前鋒營、同じく護軍統領によって統轄される護軍營とからなるが、この體制は、前者がヒヤ集團、後二者がバヤラ兵から分化・整備されて形成されたものである。

この兩者のうち、それがハン・ペイレの軍事力の根幹と目されたことから、これまでの研究ではもっぱらバヤラに焦點が据えられてきた (鴛淵一一九三八・阿南惟敬一九七一・石橋崇雄一九八一・一九八八)。これに對しヒヤの重要性については、夙に三田村泰助氏が、『老檔』 (後述) イエハ *Yehé* 攻城戰時 (一六一九年八月) の「寄せ手のうち、誰のグサが先に立つてゐるか、誰のグサが止つてゐるか」と近侍のヒヤたちや傳令をつぎつぎ指し向けて見届けさせた」という記事を擧げて「これによつてヒヤが平時も戦いにもハンに近侍し、その宿營に任じたことを推測せしめる」と指摘している (三田村一九六三—一六四、二〇八頁)。だが、ヌルハチ時代においてはヒヤはむしろ稱號としての性格が強かつたため——ダルハン⁽¹⁾ ヒヤ *Darhan Hiya* の稱號を授けられ五大臣として活躍するフルガン⁽²⁾ = ヒヤ *Hugan Hiya* を筆頭に、重臣に數多く見出される——、これまでの研究においては、ヒヤの稱號をもつ人物についての論及はあつても、ヒヤ集團・ヒヤ制そのものの検討

はなされてこなかったのである。ヒヤ―侍衛制の研究は、バヤラ制とは逆にそのほとんどが入關後に集中しており、その捉え方も、大半は内廷官制・八旗兵制の一部として概観するに止まる⁽⁴⁾。

その中で侍衛制研究に先鞭をつけた「佐伯富一九六八」は、初めての専論として侍衛の職務・地位・選出法など制度的概要を明らかにした重要な論考であり、また「常江・李理一九九三」は、典據・表記等に問題は多いものの、史料・事例を博搜して成った唯一の専著として価値は高い。ただし、これらの基本的視角は、前者の副題に「君主獨裁權研究の一齣」とあることから窺われるように中國官制史・政治史の觀點に立脚しており、基本的に入關後を主とするものである。

他方「陳文石一九七七」は、政權の中樞を構成する人的集團として侍衛制を取り上げ、これが官僚的職務というよりむしろマンジュ社會における主從關係を本質とするものであつて、君主と侍衛が多様な結合關係を取り結んで主從關係を緊密化していたこと、侍衛組織が政府中樞の人的供給源として機能したことを指摘し、これらの特質の淵源を入關前に求める。また「増井寛也二〇〇一」は、マンジュ社會における人的結合關係の一様式を表すグチュ^{guchu}（朋友・僚友、また從者などと譯される）なる用語についての専論で、その中で増井氏は、ハン・旗王の重臣が概ねグチュでもあり、就中ヒヤ集團こそ最も信任されるグチュとして側近の中核をなす存在だったことを指摘している。これら兩氏の指摘は、マンジュ―清政權の本質に迫るきわめて注目すべき成果であるが、陳氏は入關後、また増井氏はグチュ關係を主題とするものであるので、やはり入關前のヒヤ制を専論するものではない。本稿でヌルハチ時代のヒヤ制を取り上げる所以である。

*なお、私は入關前のヒヤおよびグチュ關係について、博士學位論文「大清帝國形成史序説」（平成一一―一九九九年・大阪大學）。要旨は『大阪大學學院文學研究科紀要』四一、二〇〇一、八四―八五頁）中で一章を設けて専論しており、本稿はその一部に基づきつつ大幅な増補・改稿を施したものである。これに對し「増井二〇〇二」は、グチュについての専論を提示するとともにヒヤの重要性をも指摘したもので、重なりあう點が非常に多いが、兩者はそれぞれ獨立して着目・立論したものである。ゆえに本稿では、先に公刊された「増井二〇〇二」を先行研究として示すが、彼我並行發見に係る論旨についてはその旨註記した。ただし、グチュについての考察は氏により盡されているので、「増井二〇〇二」を参照された。

本稿で使用する主な史料とそのテキスト・略稱は以下の通りである。

『舊檔』 〓『舊滿洲檔』（國立故宮博物院、一九六九）

『老檔』 〓滿文老檔研究會譯註『滿文老檔』（東洋文庫、一九五五—六三）

『賢行事例』檔 〓滿文國史院檔「先ゲンギエン」ハン賢行事例」（『石橋崇雄二〇〇〇・松村潤二〇〇一』）

『滿洲實錄』 〓今西春秋譯註『滿和蒙和對譯滿洲實錄』（刀水書房、一九九二）

『初集』 〓『八旗通志初集』（乾隆四年告成、東北師範大學出版社點校本）

『續集』 〓『欽定八旗通志』（嘉慶四年校刊、文淵閣四庫全書影印本）

『通譜』 〓『八旗滿洲氏族通譜』（乾隆九年告成、遼瀋書社・遼海出版社影印本）

著名な『老檔』、およびその原資料となった滿文檔冊を影印した『舊檔』は、ともに一六〇七（萬曆三五）年以前の巻頭部が缺失しているために、それ以前に關しては各種實錄によらねばならない。⁽⁶⁾ また近年に至り、中國第一歷史檔案館において「滿文國史院檔」なる滿文檔冊群の存在が明らかとなっており、特に實錄冒頭部分の草稿の一つと考えられる「賢行事例」檔が發現、松村・石橋兩氏によりそれぞれ譯註が公表された意義は極めて大きい。⁽⁷⁾

以下本稿では、一六〇七年以前については「賢行事例」檔・『滿洲實錄』、それ以降については『舊檔』に基づき、全時期にわたり『初集』・『通譜』はじめ各種編纂史料の記事でこれを補うことを基本方針とする。滿文史料については、表記の統一のため上記各テキストの譯文を参照した拙譯を用い、該當頁數を注記する。⁽⁹⁾

第一節 ヌルハチのヒヤ集團

實錄・『舊檔』等におけるヒヤの初出は、舉兵からかなり下った一六〇七（萬曆三五）年三月の記事にみえる「Hugan Hiya」⁽¹⁰⁾ は、⁽¹⁰⁾「Naichu とくふ名の hiya」である。だが、言うまでもなくこれ以前、特に舉兵當初の一五八〇年代におい

てヌルハチを警護し、共に戦う親兵・近臣が存在しなかったはずがない。では、八旗形成以前、ヌルハチ興起當初の親兵・近侍はどのような人々だったのであろうか。また、それはヒヤと稱されたのであろうか。本節では、舉兵から天命建元に至る時期を、實例に即して跡づけてゆく。

まず、この間の経緯^{かん}を概観しておこう。當時のマンジュ五部では、交易の利權爭奪の過熱と明の統制力低下のために、中小領主（アンバン *amban*）が亂立して抗争を繰り廣げていた。一五八三（萬曆一一）年二月、スクスフ *Suksu* 部の一領主であった父祖を喪ったヌルハチは獨り立ちを迫られ、五月、復仇の兵を擧げる。ヌルハチは、當初館^{やかた}の主程度にすぎない小領主から出發して次第に勢力を擴大、一五八七年までにスクスフ・ジェチエン *Jecen*・フネ *Hune* 三部をおおむね平定して最初の居城・フェアラ *Feara* 城を築城し、八九年までにマンジュ五部をほぼ制覇した。ついで當時強盛を誇った海西女直すなわちフルン *Hulun* 四國との對決に移り、ハダ *Hada*・ホイファ *Hoifa*・ウラ *Ura* を次々と併合、そして一六一九（天命四）年、サルフ *Sarhu* の戦で明軍を粉碎するとともに、最後に残ったイエヘを滅ぼすのである。この間、一六〇三（萬曆三二）年に居城をヘトアラ *Hetu Ala* に移し、序論で整理したような國家組織の整備を進めていった。

この時期について、「常江・李理一九九三、一一五頁」では、(1) 舉兵當初の家丁・奴僕の隨從、(2) フェアラ時代における侍衛の本格的出現、という區分を示して事例を列擧するが、その論據となる事例は一五八八年以降のものがほとんどであり、論述も概観に止まるので、あらためて事例の蒐集・考察を行なう。

1 舉兵當初（一五八三—一八七）

一五八三年五月の舉兵當初のヌルハチの戦力は、著名な「遺甲十三副」を基幹とした甲冑兵三〇騎と從兵一〇〇名程度に過ぎず、その編成は、(a) シュルガチら諸弟と(b) 舉兵前から従っているエイドウ *Eidu* ら從臣、(c) アン＝フイヤング *An Fiyanggu* を筆頭とする家僕、からなる自らの麾下を核とし、逸早く歸附したギヤムフ *Giyamuh* 寨主ガハシヤン＝ハス

フ Galaxan Hashu ヲンヤン Jan 河塞主チャンシト Cangxu ヤンシト Yangxu 兄弟が同盟者として傘下に従う、というものであった（〔江嶋壽雄一九四四、四一九—四三二頁；増井二〇〇一、三三—三五頁〕）。これに對し一族の多くはヌルハチと激しく對立、たびたび刺客を放つて暗殺を圖るなど、當初の數年は苦闘の連續であつた。

この時期のヌルハチの身邊にはどのような人々が近侍・隨從していたのであろうか。そこで、フエアラ築城の一五八七年までの時期に『滿洲實錄』・「賢行事例」檔中で名の明記される家臣を抽出し、順治重修『太祖武皇帝實錄』の漢文表記を並記し、參考に乾隆四修漢文本の表記を添えて表1を作成した。上記の諸將以外で史料に登場する家臣としては、一五八三年八月に領内のフジ田^{フジ田}寨が襲撃を受けた際にアン^{アン}・フィヤングとともにこれを撃退したバスン、同年九月に館に侵入した刺客に殺害されたパハイ、八四年四月に刺客を捕縛したローハン、八五年四月にジェチュン部の兵を寡兵で破つた際に後方哨戒に配置されたネングデ^{ネングデ}・ジャンギン、ヌルハチ兄弟とともに奮戦したヤムブル・ウリンガ、それに八六年に明領に竄入した仇敵ニカン^{ニカン}・ワイラン^{ワイラン} Nikan Wailan を追蹤して討ち取つたジャイサの七名が擧げられる。

このうち身邊に隨侍した實例といえるのはパハイ・ローハン・ヤムブル・ウリンガであり、パハイ以外の三人は「常・李一九九三、一—三頁」で最初期の「侍從」として擧げられている。ただし表1に明らかのように、ローハンら三人は、文師の著しい乾隆四修漢文本では「近侍」と表記されており、常・李兩氏もそれに據つたようだが、最も古形をとどめる順治重修本およびその草稿である「賢行事例」檔では、何れも「家人」⁽¹⁾「boo」^{boo}とあつて、滿漢文ともに「hiya」あるいは「侍」字はないのである。周知の如く、滿洲語 boo は「家」を意味する boo に屬格^がが副えられたもので、ここでは「家人」「家僕」の意である。すなわちこれらは、家僕が家内業務の一環として宿直していた事例と、身邊に扈從するがゆえに近侍して戰つた事例といふべきであり、専任の宿衛・親衛兵ということではない。

そのことをより明らかに示すのが、身邊警護の例ではないが、一五八三年八月のフジ寨の戰の兩名である。實錄漢文では双方にかかるように「部將」と冠されているが、「賢行事例」檔滿文では「araban (大臣)」・「boo」^{boo}と書き分けられて

表 1

年次	人名	『滿洲實録』・「賢行事例」 檔滿文*	『武皇帝實録』 漢文	乾隆四修漢文本
1583.8	アン＝フィヤング	Amba Fiyanggū gebungge amban [Amba Fiyanggū : Šongkoro Baturu da gebu]	部將雄科洛把土魯・巴宗	部將碩翁科羅巴圖魯安費揚古及巴遜
	バスン	booi Basun i gebungge niyalma		
	9 パハイ	Pahai gebungge niyalma		
1584.4	ローハン	booi Loohan i gebungge niyalma	家人老漢	近侍洛漢
1585.4	ネングデ＝ジャンギン	amala karun sindaha Neng-gude Janggin	後哨章金能古特	後哨能古德章京
	ヤムブル	booi Yambulu, Uringga	家人楊布祿・鵝凌剛	近侍顏布祿・兀凌噶
	ウリング			
1586	ジャイサ	Jaisa gebungge niyalma	戒沙	齋薩
1587.8	エイドゥ	Eidu Baturu	厄一都把土魯	巴圖魯額亦都

* アン＝フィンヤング～ローハンは「賢行事例」檔、それ以外は『滿洲實録』 滿文による。

おり、バスンも家僕が状況・能力に應じて戦った事例の一つであることが知られる。しかも、バトゥル（勇士）號をもつ「大臣」アン・フィヤング自身も元來家僕の出で、拔群の勳功により大臣に列せられた人物であるから（増井一九九六、一九二―一九三頁）、判明する初期の事例のほとんどは家人の隨従の一環であつたのである。

以上のように、『滿洲實録』・「賢行事例」檔に現れる家臣は、上記のエイドゥら數名を除き、漢文本の表記に關わりなく何れも家僕であり、その職務に對してもヒヤの稱を見出すことはできない。實録にその名が顯われているにもかかわらず彼らの出自が分明せず、その後代も顯れていないことは、その證左といえよう。⁽¹²⁾

しかし、近侍・親衛の事例として傳わるものは、以上だけではない。そこで次に、實録にみえないが傳記史料中に「侍衛」あるいは「隨侍」・「近侍」などと記される人物、および身邊警護の實例を抽出して表2を作成した。

まず、最初に歸附したガハシャン・ハスフは、舉兵翌年の一五八四（萬曆二二）年正月にマルドゥン Mardun 山寨で待ち伏せに遭い落命するので、傳に「隨侍」とある通り舉兵直後から行動を共にしていたことは疑いない。また、次のバンブリ Banduri は清室の疎族で（増井一九九六、一九〇―一九一頁）、マルドゥン・ムキ Mukhi 地方の勢力

表 2

年次	人名	関連記事	出典
1583	ガハシャン=ハスフ	隨侍 dahalame	『通譜』巻12本傳
1584	バンブリ	少侍太祖高皇帝 se asihan i fon ci taidzu dergi hūwangdi be weilembihe.	『初集』巻203本傳
	ローハン	少事太祖高皇帝 se asihan de taidzu dergi hūwangdi be weileme.	『初集』巻210本傳
		太祖高皇帝每行軍時、隨侍不離 daruhai dahalame umai aljaha ba aku.	『通譜』巻74本傳
		高皇帝賞識、拔爲侍衛。	『嘯亭續錄』巻3「洛翰」
	チマタ	太祖高皇帝時來歸、隸滿洲正藍旗、任侍衛	『續集』巻175「阿爾津」傳
1585	ヤングリ	其父郎柱、爲庫爾喀部長。初翊戴太祖高皇帝、時通往來。太祖厚遇之、命其子楊古利入侍 erei jui yangguri be hanci takura-bume、以女妻焉、賜爲額駙。…時年甫十四。	『初集』巻146本傳
1587	アドウン	—	—
	ナチブ	—	—
1588	フルガン	—	—
	バライ	太祖高皇帝、以巴賚爲親衛 gocika hiya.…會有王家村人搆兵、太祖命巴賚率族衆攻村南面。	『初集』巻158「鄂申巴圖魯」傳
	ボルジン	初名博爾晉、於太祖高皇帝時、率戶口來歸、授侍從轉 hanci dahalara hiya sindaha、因名博爾晉轄。	『初集』巻162本傳
	シラバ	侍衛	『續集』巻171「博爾晉」傳

- ・各種編纂史料より「隨侍」「侍衛」などと記される人物を抽出し、活動の確認される時期または歸順時期に基づいて整理した。
- ・『初集』・『通譜』は滿文本の該當箇所を並記した。長文の場合は漢文の下線部に對應する箇所のみ並記した。

によるヌルハチ謀殺の陰謀を阻止したと伝えられる人物である。この兩地はヘトアラ盆地から蘇子河に沿って下る街道上の要地⁽¹³⁾で、増井氏はこの暗殺未遂事件を、該地勢力によるガハシャン＝ハスフ殺害で緊張が高まる一五八四年正月以前のことにする（増井一九九九、五〇・五二頁）。であればバンブリも、おそらく擧兵當初からの近侍の一人とみることができよう。ただし、兩者とも「hiya」・「侍衛」といった表記はみられない。

ヌルハチはこの年六月、報復にマルドゥン山寨を攻めてこれを抜いているので、その東南方のムキ地方が従属したのもこれ以前のことと思われる。ムキ地方で著名なのはイルゲン＝ギロ Irgen Gioro 氏のアルタシ Allasi 一族で、表2に「侍衛に任ぜらる」とあるチマタ Cimata はその弟である。ただし『續集』は滿文本がないため滿文は確認できず、時期もはっきりしない。またヤングリ Yangguri（一五七二—一六三七）は、著姓シムル Sumuru 氏の出でクルカ Kurka 部長の嗣子であり、のちに五大臣に次ぐ重臣となる。彼が「入侍」してエフetu（額駙、漢語の駙馬の意）となったのは一四歳以前であるから、一五八五（萬曆一三）年以前のことと考えられる⁽¹⁴⁾。

次の一五八七年の項目に擧げた二名は、本人の傳記史料は存しないものの、のちにヒヤであることが明らかであつてこの時期に歸参したと考えられる人物である。後年「Adun Hiya」（後掲「4—B」）の稱で現れるアドゥンは、フネへ部に屬するジャクム Jakumu 地方の有力氏族タタラ Tatara 氏の出で、その母はヌルハチの生母の妹に當たる（杉山清彦二〇〇一a、第二節）。この一族は同年六月までには歸参していたと考えられるので（増井一九九九、五〇頁）、アドゥンの歸順もおそらくその前後であろう。またナチブは、ヒヤ號の初出として先述した「Nacibu」という名の hiya のことである。

ナチブなる人物は『通譜』でも同名異人が多いが、ニルの繼承を記す『初集』「旗分志」の正藍旗第四參領第三佐領^{ニル}の記事に「轄那齊布 Hiya Nacibu」の名がみえるのに對し、『續集』同箇所では「謹みて旗冊を按ずるに、那齊布は瑚納^{ニル}和地^{ニル}方の人に係る」という註記があるため、フネへ地方イルゲン＝ギロ氏のナチブであることが判明する⁽¹⁵⁾。同地のイルゲン＝ギロ氏としては、該部勢力によるヌルハチ毒殺の陰謀を通報して阻止したフミセ Humeise なる人物がおり、これも

増井氏の緻密な考證によれば、この事件は一五八七年六月以前のことと考えられるから〔増井一九九九、四九頁〕、同地のナチブの歸參もおそらくそれ以前であろう。ただし、アドウンのヒヤ號の初出は一六一〇年、ナチブのそれは一六〇七年なので、兩者とも歸參當初の稱號・職責は知りえない。

以上の如く、一五八七年以前の時期において、各種史料からヌルハチの身邊に扈從し警護に當たる人々の姿を確認することができ、編年史料に現れる事例は、全て家僕層が状況・能力に應じて従事しているものであった。また、表2に示したように、漢文で「隨侍」・「入侍」などとあっても滿文に「*heya*」とある例は全くなく、ヒヤないし侍衛であることが明記されている場合も、その時期がこの時代にまで溯るかどうかは、斷定することはできない。すなわち、この時期はヌルハチが未だ中小アンバンの一人であった時代だけになお職務は未分化で、専從の親衛隊とまで呼べる組織・集團は見せず、ヒヤの稱もまだ存在しないといわねばならない。ただし同時に、勢力・門地の大小・高下はあれ、歸順したアンバン層の隨從も確認されること、若年での隨侍の事例が見出せることは、後年の萌芽として注意すべきである。

2 フェアラ時代（一五八七—一六〇三）

ヌルハチの蘇子河・渾河流域制覇の形勢がほぼ定まると、一五八八（萬曆一六）年四月ごろ、ドンゴ Dongo 方面よりスワン Swan・ドンゴ・ヤルグ Yargu の三部長が各々一族郎黨を引き連れて來歸した。これがヌルハチの覇權を事實上決定づけるものであったことは、實録がこれを以てマンジュ統一と頌することからも知られるであろう。このうちヤルグ寨長フラフ Hulahu の子フルガン（一五七六—一六二三）こそ、ヒヤ號の初出として現れ、後にダルハン⁽¹⁶⁾ヒヤの稱號を授けられる人物である。

〔一〕 Yargu の寨の Hulahu という名の大人は、自らの兄弟の一門の者共を殺し、隸民を率いて従い來たので、太祖 Sure Beile たちの子 Hurgan を自らの Gioro 姓に入れ、子として養って、第一等大臣⁽¹⁶⁾とした。

「Sure Beile」とは、一六〇六年以前のヌルハチの稱號である。このように、フルガンはギョロ（覺羅）姓を賜姓され養子とされたといい、このとき彼は一三歳であった。彼がいつの時點でヒヤの稱號・職務を與えられたかは明らかではないが、傳には「上の撫育の恩に感じ、誓ふに戎行に死を效さんことを以てし、戦に出づる毎に輒ち前鋒となる」とあつて、養子としてまた重臣として、彼が奮闘したことを傳える。⁽¹⁸⁾

ドンゴ部が來降すると、最後に残った獨立勢力は建州衛正系の名門ワンギヤ Wanggiya 部のみとなる（増井一九九七）。ヌルハチは、同年後半から翌八九年初めにかけて同部に出兵してこれを降し、名實ともにマンジュ統一を達成した。

ワンギヤ氏首長層については、次の興味深いエピソードがある。

「2—A」西喇巴札爾固齊 Siraba Jangci、……太祖高皇帝の時、所部を率ゐて來歸し、初め牛泉を編して牛泉の事を管せしめ、五大臣の列に預からしむ。癸巳年、付爾佳齊 Fugaiya の兵と戦ふに、常に太祖の大營に在りて翼衛して功あり。哈達 Hada の西忒庫 Sietu、叔貝勒を射んとして、第二矢を發するに、西喇巴、身を以て鎬鋒に當り、中り傷つきて歿す。

「2—B」博爾管^{ボルジン}、……太祖高皇帝の時、戸口を率ゐて來歸し、即ちこれを轄せしむ。佐領に任ぜられて滿洲鑲紅旗に隸し、尋ゐで侍衛を授けらる。嘗て富勒佳齊^{フルギヤチ}を征するに従ふに、博爾管の族弟侍衛西喇布^{シラバ}、哈達の錫特庫^{シテク}の兩矢を射中する所となるも、博爾管、其の矢を抜きて還り射て、遂に錫特庫を殲す。⁽¹⁹⁾

記事中のフルギヤチとはハダ領内で、「癸巳年」とあるようにこの戦いは一五九三年のことである。この兩記事によれば、「侍從轄」（表2）とされるボルジンと、その「族弟」シラバがともにこのとき既に「侍衛」であつたという。シラバが身を以て庇つた「叔貝勒」とは、滿文本でも「eike beile（叔父のベイレ）」とあるが、私はこれを、史料「1」にもみえる當時のヌルハチの稱號「Sure Beile／淑勒貝勒」の漢字表記の錯簡、およびその滿譯と考える。同じ記事中に「常に太祖の大營に在り」とあることが、この考えを支えてくれるであらう。

諸史料によれば、この戦は自領襲撃に對する報復としてハダのフルギヤチ寨を急襲したもので、撤收に際しヌルハチは伏兵を仕掛けた地點までハダ兵を誘き出すために自ら殿となつて戦い、アン＝フィヤングとともに前後四騎の敵と鏑迫り合いを演じたという。その際の手勢はわずかに騎兵三・歩兵一二だったといい、フルギヤチ寨襲撃時のことか撤收時のことかは明らかではないが、ボルジン・シラバがヌルハチに扈從して戦つていたことは確かであろう。これは、「侍衛」と稱されるいはヒヤの稱をもつ人物が、實際にヌルハチの護衛に當たつてゐる最初の例である。

この事例で注目されるのは、ワンギヤ部の最終的な制壓（一五八八—八九年）からわずか四年餘りではないにもかかわらず、歸參間もないボルジンとシラバが、既に「侍衛」に充てられ、實際にヌルハチを護衛してゐることである。また、このとき戦没したシラバが既に「侍衛」だけでなくジャルグチ（斷事官）の稱號をもち「五大臣之列」にあつたということも注意される。新參の彼らが重用されてゐたということは、その勢力・門地の大きさ・高さが背景にあるに相違ない（増井一九九七、七九頁）。と同時に、そのボルジン・シラバが最前線でヌルハチに扈從してゐることは、いかに高く遇されようと、あくまでヌルハチと主従の關係にあることを明示するものといえよう。

なお、ワンギヤ部をめぐつては、いま一つ興味深い記事がある。表2に示したバライ（ニフル Niohuru 氏、エイドゥウの同族）は、傳に「親衛」、満文本には「*gocika hiya*（親隨のヒヤ）」とあり、後段の「王家村 Wang Giya dzun gagan」の兵を構ふるあり」が *Wanggiya*＝ワンギヤ部との戦鬪を指すとすれば、これは同部と初めて交戦した一五八四（萬曆一二年九月、ないし同部攻略の一五八八—八九年、可能性としては八八年後半のワンギヤ城攻略のことと考えられるのである。であるならば、後代の追記の可能性は排除できないものの、満文でヒヤと明記される最初の例といえる。バライは、没年から逆算すると一五六六（嘉靖四五）年の生なので、ヒヤとしての活動は二〇歳前後のことと推測される。

この後、右のフルギヤチ戦直後のグレ Gne 山の戦でフルン連合軍を撃破したヌルハチは、一五九九（萬曆二七）年にハダを滅ぼし、一六〇一年には全住民を領内へ強制移住させて完全に併合した。次に舊ハダ支配層についてみてみよう。

『老檔』ムクンニタタン表（族籍表）として知られる一六一〇（萬曆三八）年の貢勅配當表中では、ハダ王家嫡系のウルグダイ Urgadai を筆頭とする舊王族・重臣が、多數の對明入貢權の配當を受けているが（『三田村一九六三—六四、第六節』）、その中にみえる「Mooban Hiya」はハダ王族の一人で、以後もヒヤ號を帶びて現れる⁽²¹⁾。

また、後年康熙帝幼時の輔政大臣の最長老として知られるソニン Sonin（？一六六七）は、『初集』の本傳に

[3] 索尼巴克什 Sonin Baksı、大學士希福巴克什 Hife Baksı の兄碩色巴克什 Sose Baksı の長子なり。太祖高皇帝龍興するに、索尼、父碩色に隨ひて哈達國より衆を率ゐて來歸す。……索尼、早くより家學を承けて滿・漢・蒙古文に兼通し、文館に在りて事を辦ず。初め頭等轄 nu jergi hiya に任ぜられ、大兵の征討に隨ひて、向ふ所功あり。⁽²²⁾

とあつて、ハダより歸參して頭等ニ一等ヒヤとなつたことを傳えている。ソニンが父に伴われて歸參したのはハダ滅亡からそれほど隔たらぬ時期とみられ（『神田信夫一九六〇、四六—四七頁』）、少年時代からヒヤとされたものと考えられる。ソニン一族は名族ヘシエリ Hesi 氏で、文事を「家學」としたとあるように大國ハダでも相當な地位にあつたとみられ、これも前出フルガン・ボルジンあるいは舊ハダ王族と同様の事例といえよう。

ハダの併合に伴い、ヌルハチは一六〇三（萬曆三二）年に、手狹になつたフエアラ城からヘトアラ城へ遷都する（一六一九）。これらハダ併合・ヘトアラ遷都が、一五八七年のフエアラ築城につぐ次の劃期をなすといつてよいであろう。ヒヤ號が確實に現れるのはこのヘトアラ時代であり、既述の如く一六〇七年にフルガンニヒヤ・ナチブニヒヤが實録・『舊檔』に現れ、一六一〇年のムクンニタタン表にはアドウンニヒヤ・モーバリニヒヤの名がみえる。

以上のように、天命建元以前において、親衛・側近としてのヒヤ集團が段階的に形成されていったのである。

第二節 ヒヤの職務と特徴

1 ヒヤの職務

では、ヒヤはどのような職務に當たつたのであろうか。〔常・李一九九三、五―八頁〕は、ヒヤの職務として、常にハ
ンに随侍することと宮門の警備とを指摘して、事例を列挙する。ここではそれをふまえつつ、より詳細にみてみたい。

①常時ハンに近侍すること。

前記の如く、『舊檔』イエへ攻城戦時にヒヤが近侍して監軍・傳令などに用いられているくだりがあり、またヒヤの稱
號をもつ者が戦場で扈從していることは、先のシラバのエピソードからも知られる。それ以外の近侍の記事を掲げよう。

〔4―A〕ハンが狩獵に出て、Husina Suwa という名の山を放圍して行く時……、ハンに側近く従い行く
Buyanggu Hiya と、ハンに食事を供する Yakamu とが言うには、……

〔4―B〕ハンの右側に立った Adun Hiya と、左側に立った Erdeni Baks⁽²³⁾ が、それぞれの側から迎えに行き、八大
臣が跪いて持った書を受け取つて、ハンの前に捧げた。

〔4―A〕は、『舊檔』天命元年の直前にまとめて記されたヌルハチの事蹟の一節で、正確な年次は不明であるが、ブ
ヤング^ニヒヤなる人物が狩獵に隨行していることを伝える。〔4―B〕は、天命元年元旦のハン位即位式のくだりで、こ
の輝かしい式典において、書記官筆頭のエルデ^ニバクシと並んで、ジャクム地方タタラ氏のアドウン^ニヒヤが侍立して
いる。

以上のように、ヒヤは戦時・平時ともにハンに常時近侍していた。

②平時の宮殿警備。

[5] [一六二二年九月] 初七日(a)の晩、Mandarhan Niru の Ken の家の一モンゴル人がハンの屋敷の門に入つたことを、門を監視していたニキルのバヤラの者や、屋敷内を監視していたヒヤたち(b)は誰も知らなかった。「そのモンゴル人は、門を」入つてハンの居る家の西の側壁を周りに行つて、北側の入り口から入るのを女らが知つて告げたので、Yasun・Udanan・Asari が捕えた。(c)その罪を、初八日に法によつて審理し断じたこと。「ハンが選んで門を見張れと委ねたヒヤたち、汝らはそのような悪人が門に入つても知らなければ、門を見張つたとて何の益があるうか」と罪として、ニキルの二十人(e)を、十ずつ鞭打つた。Bada という者には、「汝をハンは登用して大臣とし、参將の職とヒヤの名を與えて子として養つたのに、養つた恩を思つてそのような悪者が入つたのをなぜ追及しようとせず、知らなかったのか」と罪として、参將の職を革め、遼東以來賞與した全てのものをみな沒收した。(24)(傍線引用者)

ヌルハチは一六一九—二二(天命四—一六)年の間頻繁に遷都しており、これは、この年入つた遼陽城での不始末である。この記事は、門衛の失守として常・李兩氏が、また、バヤラが關與していることから石橋氏が、それぞれ言及している〔常・李一九九三、六—八頁；石橋一九八一、六—七・一七頁〕。石橋氏は、バヤラのヒヤ(白侍衛 sanggiyan hiya、傍線部(a)(d)(e)が門を守り、屋敷内の見張りにはヒヤ(b)が従事した、と整理しており、ヒヤが宮殿警備に當たっていること、またヒヤに二種の區分があることが確認できる。

その顔觸れをみてみると、まず、(b)と(c)が同一と考えられることから、「屋敷内を監視していたヒヤ」の名が分明する。この三人の筆頭に擧がるヤスン(a)は、バトゥル號をもつ近臣の一人として『舊檔』に頻出する。また責任を問われたバダは「子として養つた」人物であつて、世職では参將の地位に在り、ヒヤとして警備の責任を負つていた。すなわち、フルガンと同じく養子とされた人物が、實際に宮殿警備に當たつていたのである。

このほか宮殿警備の實例としては、『初集』「吳拜 Dba」傳に、一六二六(天命一)年のこととして、ヒヤであつたウバイが「薩譚牛泉 Satan Niru 下の一人の、二人を刺殺して宮殿に奔入するあり。吳拜、徒手にてこれを執ふ」とあり、(26)

侵入者を捕らえたことを記している。ウバイ（一五九六—一六六五）は大姓グワルギヤ Gwalguya 氏出身で、グレ山の戦功で知られるウリカン Uricka の長子であるから、名門にして功臣の出である（杉山二〇〇一a、一八頁）。

これら諸例から、ヒヤが平時において宮殿警備に当たっていたことが確認される。

③ ハンの側近・近侍としての、さまざまな任務の委任。

(1) 使者

：後年、同盟国となったモンゴルのホルチン部長オーバ Ooba に對する問責の中に、「その後、再びイエヘに與して、我が Buyanggu Hiya を殺した」という一條がみえる。⁽²⁷⁾この人物は、先の「4—A」にみえるブヤング＝ヒヤのことと思われる、イエヘ滅亡すなわち一六一九（天命四）年以前に出使して殉職したものと推測される。

(2) 出征

：ウラを大破した一六〇七（萬曆三五）年の烏碣巖の戦の記事に、ヒヤ號の初出として既に紹介したように、フルガン＝ヒヤ・ナチブ＝ヒヤの名がみえる。ナチブは「我が二子が戦で馬に乗って攻めればその身を見守り行け。馬から下りて攻めれば馬の手綱を執れ」とて長子チュエン・次子ダイシャン Deshan に附けられており、結局任務不履行で處罰されるのではあるが、補佐・監軍の任にあったとみられよう。この戦いで活躍したフルガンは、一六〇九年には一千の兵を率いて東方フイエ Heye 路に出征し、その功によりダルハン＝ヒヤの稱號を授けられた。

なお、フルガンの場合は一等大臣・五大臣といった別の職責に由來するものという可能性もあるが、これらの軍功に對し授けられたのがダルハン＝ヒヤの稱號であることから、ヒヤの職務の例に數えてよからう。

(3) 行政・軍事等の官職兼任による國務參與

：ヒヤの多くが、随時の出任に止まらず、五大臣はじめ國政の要職に就任している。例えば、ダルハン＝ヒヤ即ちフルガンは最年少で五大臣に列し、後にそれに代わるものとして都堂が新設されると、アドウン＝ヒヤとともにこれにスライド

している（松浦一九九五、二四一—二四三・二六七—二七一頁）。また八旗の編成に伴い、多くのヒヤが(a)ヌルハチ直屬の兩黃旗の首腦を構成するとともに、(b)他の六旗に配屬され、グサ以下の各單位を指揮するとともに若年の旗王を補佐した。例えばヌルハチ直屬の兩黃旗では、正黃をフルガン、鑲黃をアドウンが率い、ボルジン⁽²⁸⁾はダイシャン麾下の兩紅旗で鑲紅旗グサイ⁽²⁸⁾エジエンを務めた（阿南一九六七、一五六—一五八頁）。また一六一八（天命三）年四月の撫順攻略後の論罪記事において、ナチブが「五ニルの主」として名前が擧がっている。このようにヒヤたちは、その稱號を帶びたまま一般の大臣と同じように世職と八旗官の双方を授けられ、さらに國務ポストを兼務することで國政にも參與した。

以上、ヌルハチ時代のヒヤは、少なくとも大別①—③の三つの職務に従事していた。佐伯氏は入關後の御前侍衛の職務として、氏の強調する間諜以外に、①天子の護衛、②上諭・上奏傳達や出使など側近としての用務、③要務・要職の委任を擧げているが（佐伯一九六八、三三五—三八頁）、かかる特徴はすでに入關前、ヌルハチ時代に淵源していたのである。

2 ヒヤの特徴

次に、これらの職務に任じるヒヤの特徴を考察しよう。

①地位・身分

ヒヤの地位・身分を明確に規定した史料はないが、これまでみてきた例から窺えるように、ヒヤには、ボルジン⁽²⁸⁾ヒヤの如く人名に連稱される稱號に近い場合と、「5」にみえる、バヤラの中から選拔された警護兵という場合とがある。このうち前者の用例は、ヒヤの稱を帶びたままさまざまな官職に就任している例から知られるように、組織を構成するものでなく個人の稱號というべきであり、物理的に近侍しているかどうかにかかわらず、その本質は親臣の稱號という点にあるといえよう（陳一九七七、六二五頁）。このように、ヒヤには親臣の稱號としてのヒヤと、警護組織としてのヒヤとの

二種の用例があり、二重構造をなしていたことに留意せねばならない。ただし、「5」でヤスン・バダが警備に責任を負っていることから窺えるように、これら二種は別の系統をなしていたのではなく、上下の関係として捉えるべきである。

他方、稱號とはいうものの位階制上に位置づけられたものではないことは、「5」のバダの例において、世職の「參將の職」と「ヒヤの名」とが別個に擧げられていることから容易に看取されよう。また、親臣に授けられる稱號はヒヤだけではなく、兼稱を妨げるものでもない。例えば、「3」でみたようにソニン⁽²⁹⁾はヒヤではあつたが史料上もつばらバクシの稱で登場し、ヤスンもヒヤでなくバトゥル號で呼ばれている。このことは、ヒヤがバトゥル・バクシなどともに、側近に與えられる稱號の一つであつたことを示すものといえよう。すなわちヒヤは警護職そのもののみを指すわけではなく、またヒヤのみが側近であつたわけでもないのである。

このようなヒヤの地位の特殊さを窺わせる好個の事例として、次のものがある。すなわち、一六二一（天命六）年五月、ヤスンが處罰される際に「衆諸王・諸大臣・ヒヤたち」で協議させたとあり、⁽³⁰⁾ヒヤの處罰に際しヒヤ集團が合議に加わっているのである。

②出自・來源

出自の特徴としては、敘上の諸例から明らかなように、歸順した勢力の主要者、特に首長格の系統の人物がほとんどを占めていることが著しく、そのなかでも若年の子弟が目立つ。「常・李一九九三、三一四頁」では、來源として①家僕・従者からの陞任、②歸順首長層の子弟、③部下から選抜した勇士、④一族・重臣の子弟、の四種を擧げるが、①は極初期の機構未整備・機能未分化の故であつて、あくまで主たる來源は後三者であり、以上の諸例においても家僕の兼務はみられない。これは國勢の伸長に伴う組織分化を示すものであるが、また同時に、舊首長格の人物が、客分・同盟者としてではなく護衛・従者として主従關係下に位置づけられたことをも意味しているといえよう。

③人材養成機關としての役割

①②の事實から、ヒヤの出身・地位の高さと、ヒヤ制が政權中樞の人材プールとして機能していたことが窺われる。なかでも年少者が目立つことは、文字通りの養成・養育機關の役割を果たしていたことを示すものであろう。例えば著名なフルガン（二三歳）の外、次に紹介するエイドウの子イルデン^{Ildeu}と前出ウバイの事例が興味深い。

エイドウ家の漢文家譜『鑲黃旗鈕祜祿氏弘毅公家譜』（乾隆二年初修・同三〇年續修、抄本、不分卷、東洋文庫藏）に、以下の記事がある。

〔6〕八世弘毅公「エイドウ」第十子 益尔登^{イルデン}、丙申年正月初三日（明萬曆二十四〔一五九六〕年）に生る。孩提の時に當り、象貌豐俊なりて常兒と同じからざれば、太祖高皇帝、愛でてこれを宮中に撫す。八九歳の時、晩間に群兒と共に樓上に戯むるに、太祖高皇帝、群兒の膽量を試さんと欲し、一人をして異形を爲りて以てこれを恐嚇せしむ。群兒これを見て懼れて奔走する者あり。敢て動作せざる者あるは、惟だ公と吳拜^{ウバイ}の二人なるのみ。……太祖高皇帝、贊して曰く「此の二子、後必ず巴圖魯^{バトゥル}と爲らん」と。愈々愛養を加ふ。年十四五なれば、即ち軍中に在りて行走せしめ、稍々長ずれば授けて侍衛と爲す。

イルデンとウバイはともに一五九六年生で、数えの八歳以前、すなわち遅くとも一六〇三（萬曆三二）年以前のフェアラ時代に宮中に入れられて養育されたという。イルデンは、ここにあるように一六〇九年頃には戰陣へ隨従しはじめて、それから數年内に「侍衛」を授けられている。また、ウバイも一六一〇年頃から戰場で活躍、一六一八—一九（天命三—四）年頃に卷狩で功を認められて「轄^ハ」⁽³²⁾を授けられており、フルガン同様ギョロ姓を賜姓されたという。さらに、『家譜』によればウバイはエイドウの娘を娶っており、イルデンとウバイは同じ年で共に育ったというだけでなく義兄弟でもあったのである。ウバイは、傳によればヌルハチとホンタイジの二代にわたって公主降嫁を持ちかけられたにもかかわらず、妻すなわちエイドウ家との姻縁を理由に二度とも斷つたという。

以上の事例から、(1)臣下の子弟を宮中で養育して教育・訓練を施すとともにその素質を試し、それに應じて登用してい

ること、(2)君主であるヌルハチとの間、また共に養育されたヒヤ同士の間強い繋がりが存すること、(3)それが君主・同輩との通婚や賜姓など擬制家族的関係下への包攝という形で具體化・緊密化されていたこと、を知ることができる。⁽³³⁾これは成人の場合でも、随侍する中で薫陶を受け資質を見定められるという点において基本的に同じであろう。

加えて、私はこのような君主との密接・鞏固な関係がヌルハチ直屬の兩黃旗において顯著に看取されることを論證したが〔杉山二〇〇一a、一八一―二〇頁〕、注目すべきことにヒヤの多くは兩黃旗に屬していた。エイドウ一族・フルガン一族・アドウン一族・ウバイ・バダらは少なくともヌルハチ晩年、正黃旗に所屬しており〔同、第1・2節および表1〕、またヤスン⁽³⁴⁾は鑲黃旗に所屬していたのである。このことは、「兩黃旗は、ヌルハチと非常に緊密な関係をもつ人々の集團であり、質的にも他旗を壓倒する最有力集團だったのである」〔同、二九頁〕という前稿の結論と一致する。

なお、ヒヤへの採用は、單に恩顧・信任の表れというよりむしろ、歸參者をそれほど時間を空けずに編入する例が多いことから窺えるように、一種の人質としての性格を帯びていたことを指摘せねばならない。⁽³⁵⁾第二節でみたフルガンの收養あるいはボルジン・シラバの「侍衛」は、その實一面で人質、一面で臣下としての再教育過程であったといえるであろう。

④家政機關・書記局との關係

ヒヤは、ハンの身邊に仕える集團として家政機關と、またハンの側近・近侍として書記局と、それぞれ密接に關係していた。先にみた「4―A」では、ブヤング⁽³⁶⁾ヒヤとともに「食事を供する」ヤカムなる側近が隨行しており、ヒヤ即ち親衛隊と家政機關とが一對のものであることを暗示している。他方、「4―B」では、即位式の左右にアドウン⁽³⁷⁾ヒヤと書記集團の長エルデニ⁽³⁸⁾バクシが侍立していた。これは、親衛隊と書記局とが、ハンの側近の兩輪であることを明示するものといえよう。このことを端的に示すのが「3」のソニン⁽³⁹⁾バクシのケースであり、彼は滿蒙漢文に通じて文館に屬しながらも、同時に頭等⁽⁴⁰⁾一等ヒヤでもあった。そもそも③において指摘した宮中での養育は、これまでむしろ書記官において著しいことが指摘されているのである〔神田一九六〇、四八―四九頁〕。このように、親衛隊（ヒヤ）・書記局（バクシ・

ビトヘシ biteses)・家政機關(ボーイ)三者それぞれがハン側近を構成し、これら三組織の間には相互に密接な関係が存したとみることができる。⁽³⁶⁾

⑤旗王のヒヤの存在

先にみたように八旗各旗にヌルハチのヒヤが出任していたが、各旗王にも自身のヒヤが存した。すなわち、ネエン Neyen のグワルギヤ氏のイエジュンゲ Yejunge は、傳に「貝勒の轄員 belle i hiya を授けらる」とあり、その後ウラ征服戦で戦死しているから、⁽³⁷⁾遅くとも一六一三(萬曆四一)年以前、既にヌルハチ以外のベイレもヒヤを有していたことが確認できる。また、ホンタイジ時代に活躍するヒルゲン Hergen の傳には、「初め太宗文皇帝に藩邸に於て随侍す」とあって、即位前から仕えていたことが明記されている。⁽³⁸⁾入關後の定制では皇帝のヒヤを侍衛、旗王のそれを護衛と稱し、ともにヒヤを有していたが、これもまたヌルハチ時代に溯るのである。⁽³⁹⁾他方このことは、ハンが一面で黄旗の旗王であることを意味するものともいえる。

以上①⑤の特徴を通覧したとき、警護という本来の任務に止まらない、ヒヤという人間集團の本質がみえてくるであろう。⁽⁴⁰⁾すなわちヒヤ制は、(1)親信の臣を近侍させて手足として用い、(2)その子弟を將來の政權幹部として養成・選拔し、さらに(3)新附者を質子として留めおくとともに臣下として位置づけなおしていくという、ヌルハチ權力の中樞を構成・再生産する人間組織であるといえよう。そしてヒヤ集團への編入は、賜姓・通婚・養子といった方策とともに、君主との人格的紐帶の強化、ひいては廣義の家族員への取り込みとして機能し、ヌルハチはこれらの関係を多様かつ多重に取り結ぶことで、あらゆるアンバン層を、自らを君主にして父とする關係の下に位置づけていったのである。それが最も端的に表れているのが、ヒヤに許された、恩恵としての「父なるベイレ」の呼稱である。

〔7〕十四日に、ハンが言うには、「側近のヒヤたち、主だった衆大臣たちは『父なるベイレ (belle ama)』と言え。

婿となる者は『妻の父なるバイレ』と呼べ。國人は『ハン』と言うがよい」と言つて書を書いて見せて、「父」と呼べる者を定めた。(側近のヒヤたち・諸大臣が「父なるバイレ」と言つたのは、⁽⁴⁾ H^{H} の愛顧を區別するものである)ここに、ハンとヒヤとの間の、父子に擬せられる緊密かつ一面では隸屬的・私屬的な主従形態があますところなく語られている。

すなわちヒヤ制の本質とは、規模の大小、門地の高下こそあれ、本來ヌルハチと同格の存在(アンバン、バイレ)であつた諸勢力の首長・重臣層を、君主と侍従・護衛という關係に位置づけることによつて直接の主従關係の下に組み込み、それを通して單なる統屬關係・上下關係に止まらない、いわば家産的・家父長制的支配關係下に包攝していくというものだったということができらるであらう。

第三節 ヒヤ制の淵源

1 ヒヤ制とケシク制

以上の如き特徴を有するマンジュのヒヤ制の淵源は、何處に求められるであらうか。これが明制の侍衛とは全く別のものであることは、火を見るより明らかであらう。⁽⁴²⁾ ここまで述べ來つたならば、われわれはモンゴル帝國の親衛隊——ケシク(*Keshig* 怯薛)に想到せざるをえない。

ケシクとはモンゴル大カアンの警護に當たる一萬人の親衛隊で、^{ケフチウル}宿衛一千・^{コルチ}箭筒士一千・^{トルカウ}衛士八千によつて構成され、四班が三日交替で勤務し大カアンの身邊に奉仕する一大人間集團である。幸いにしてケシクについては、不充分とはいひながらも、本稿で取り上げたマンジュのヒヤ制と比べれば、はるかに厚く長い研究の蓄積が存する(「箭内互一九一六」村上正二一九五一・一九六二・護雅夫一九五二a・b・本田實信一九五二・一九五三・蕭啓慶一九七三、ほか)。そこで私なりにその

成果を要約すれば、以下の如くなる。

① 君主の警護に當たる一方、家政業務全般に従事し、さらに國務處理・政策決定など國政にも關與。親衛隊であると同時に政府中樞を構成していた。

② 千人隊長・服屬諸勢力の子弟を、しばしば若年で採用。譜代優遇の側面とともに質子・再教育の側面を有し、將來の政府中樞を擔う人材の養成組織でもあった。

③ 君主の家産的支配・隸屬關係にある臣下＝ネケル（ノコル＝ヌフル *nokor*）によつて統轄され、君主との間、またケシク同士に強い結合關係が存した。

④ 大カアンだけでなく、各王家も小型のケシクを保有し、各ウルスにおいて同様の機能を果たしていた。

以上四點は、上に舉げたマンジュのヒヤ制と、驚くほどの共通性を帯びている。

むろん、君主の周邊の人間集團が側近・警護組織であるとともに政府高官の人材供給源となるというのは歴史上通有のことだ、という反論はありえよう。⁽⁴³⁾しかし、例えば中華王朝的國家パターンにおいては、かかる人格的結合に基づく組織形態はあくまで一過性のものであつて、ある段階で儒教理念や律令・科擧などに基づく支配に切り換わるのに對し、ケシク制とヒヤ制は、慣習法的な組織原理として政權構造のうちに制度化されている點において、決定的な違いがある。あるいはまた、成文では規定されていないにもかかわらず君主の側近として權力を握るという點では宦官と同じともいえようが、例えば明の宦官の專權が君寵にすぎないのに對し、ヒヤは正規のリクルート法なのである。すなわちマンジュのヒヤ制は、同じ君主の側近集團とはいえ、權力形成期一般における非常態としてのそれや、中華王朝における宦官的存在などではなく、モンゴル帝國の組織パターンに淵源するものと考えられるのである。⁽⁴⁴⁾

いまあらためてモンゴル帝國のケシク制にひきつけて見直してみると、親衛隊の核心をなすネケルに即してチンギス＝カン *Činggis Qan* 國家の形成と構造を論じた護雅夫氏の理解が注目されるであろう（「護一九五二 a, b」）。曰く、ネケ

ルは遊牧首領（ノヤン *noyan*・カン *qan*）に隨從・奉仕する從者であり、その主從關係は、それが奴僕そのものではないにもかかわらず、主―奴、父―子、兄―弟に準えて觀念される「遊牧家父長對家族員・隸屬民」の關係、すなわち「家産制的支配・隸屬關係」というべきものであった。チンギス・カン國家の成立とは、これらネケルたちによつて構成・統轄される親衛隊・ケシクを軸に、元來チンギスに屬さない遊牧首領たちをネケルとしてチンギスの家産的支配下に繰り込み、その「家」組織に編入していく過程として把握される、と。⁽⁴⁵⁾

これら諸點は、チンギスをヌルハチに、ケシクをヒヤに置き換えたならば、以上述べてきたマンジュのヒヤ制にそのまま當てはまるであろう。では、モンゴル帝國の構造理解の關鍵となるネケルに相當するものとは、マンジュにあつては何かであらうか。

ここにおいて想起されるのが、側近・親信の者として夙に注意されてきたグチュ *guchu* なる關係である（三田村一九六三―六四、一二二―一二四・二二頁、今西春秋一九七〇、増井二〇〇二）。グチュとは特定の地位・階層ではなく「主（*chig*）」と一對の社會關係をいい、グチュの重要性とその性格について指摘した三田村氏は、これを「同伴者、相談相手、腹臣の謂」とし、「その主君と生死を共にした」ほどの緊密な主從關係にあるとしつつ、その來源があくまで「當時の貴族階級に屬するもの」であることを強調する。では、なぜ「生死を共にした」というような強い隸屬性が同時に指摘されるのか。そこで注目されるのが、夙に知られた次の事例である。すなわち、ヌルハチから一時執政を委ねられた長子チュエンには「バイレたる汝が死ぬなら、我らも汝に従つて死ぬ」と誓った四人のグチュがおり、その一人は、チュエン失脚に先立ち「父なるバイレが死ぬ前に、我は先んじて死のう」といつて自決した、というのである。⁽⁴⁶⁾「父なるバイレ（*baile amai*）」とは、「7」にみた、ヒヤに特權として許された呼びかけではなかったか。これは、君主の側近・腹心たるヒヤが、グチュとしても把握される關係にあつたことを示すものにほかならない。そしてこのようにグチュは、父と子、家父長と家族員にも擬すべき恭順・服從の求められる存在であり、その限りにおいて恩養・慈愛の對象とされる關係であつたのである。

三田村氏が看破し、最近あらためて増井氏が論じた通り、これはまさしくネケルの性格・機能と一致する。

ただし、ネケルを「ヨーロッパ中世の僚友を思わせる」とするウラジミルツォフの理解は護氏によって根本的に修正・發展させられたにもかかわらず、三田村氏はウラジミルツォフに依據しているという問題點が存する。しかしながら、右に述べたように、グチュはむしろ、「對主君關係において隷屬性の濃厚な」「家父長的恩恵―家族的恭順」の關係である、という護氏のネケル理解にこそいつそう適合するものであった。すなわち、チンギス・カン國家におけるネケルとケシク同様、ヌルハチのマンジュ國家においては、かかる性格を有するハンのグチュであるヒヤ集團を核として、その國家を統合・擴大、さらに再生産していったといえよう。

2 ヒヤ制の淵源

では、このような組織技術の由來は、どこに求められるであろうか。そもそも同時期のモンゴル勢力には、モンゴル帝國時代の親衛制――ケシク制は傳存していたのだらうか。⁽⁴⁷⁾ 残念ながら、現在のところケシク制とヒヤ制との間に、直接的な繼承關係を示すものはない。また、清代以降の各種辭書ではモンゴル語の *kyas* を滿洲語の *hya*・漢語の侍衛と説明するが、これは後に清の統治下でモンゴル語に入った語彙・制度であつて、この場合根據とはなしえない。モンゴルからの移入を想定した場合、考えられる可能性は、第一に、モンゴル時代に移入されて建州三衛―マンジュ五部内部に傳存したこと、第二に、一六―一七世紀のある時期にもたらされたこと、である。

なお、注意しておかねばならないのは、ケシク的人間集團・人的紐帶形成制度が存在することと、「ヒヤ」なる用語の傳播とは、區別して考えねばならないことである。そもそも類似した制度が存在することが、直ちにその傳播・移入を證すことにはならない。⁽⁴⁸⁾ グチュがモンゴルのネケルのみならず中央アジア―イスラーム世界のチャーカル *chakar*・グラー *ghulam* (清水和裕一九九二:二〇〇〇) とも多くの共通性を帯びていることから明らかなように、かかる人間組織・

慣行の存在自體は必ずしも傳播の關係にあるとは限らないし、*Kiy-a*—*hiya*の語の繼受關係がいえたとしても、その職務・地位までが導入以前に存しなかつたことを意味するわけではない。ヒヤの稱が見出せない一五八〇年代においても、それに相當する職務が遂行されていたことは既にみた通りである。

その上でまず第一の可能性についてであるが、周知の如く、ジュシエン人自身の手になる記録はヌルハチ政權の登場を待たねばならず、直接このことを證す史料はない。しかし、モンゴル時代にジュシエン人の制度・文化が著しくモンゴル化したこと、以來明末に至るまでそれが傳存していったことは、さまざま面からの指摘のあるところである（〔和田清一九五二、六三七—六三八頁・岡田英弘一九九四・劉小萌一九九四〕）。例えば親衛制以外にも、既に言及したものだけでもジャルグチ・ダルハン・バトゥルなどの官名・稱號がマンジュ・フルンで廣く知られており、これらは元代以來の傳存であることと疑いない。モンゴル時代からの連續性を強調する三田村氏は、一五世紀初頭の建州の軍制がモンゴル傳統とされる左・中・右三軍編成であつたこと、グサ制がモンゴル時代の部隊編制に起源すること、を指摘している（三田村一九六二、二九三—二九九頁・一九六三—六四、一三九—一四〇頁）。また、朝鮮初期におけるジュシエン人の侍衛入侍という、きわめて注目すべき問題について論じた河内良弘氏は、一五世紀前半に盛んに行なわれた侍衛授職の動機が、朝鮮側の意圖ではなく、入侍すなわち人質と考えたジュシエン人が恭順の意を示すために自發的に希望したものであることを論證する（〔河内一九五九〕）。かかる彼らの侍衛理解とは、要するにケシクにほかならなかつたものではあるまいか。

以上から、第一の可能性に相當の蓋然性を認めることができるであろう。ただしその場合、ケシク・コルチあるいはトルカといったモンゴル時代の用語が傳存せず、ヒヤという語が用いられているのはなぜか、という問題が生じる。

他方、第二の可能性が成り立つためには、まず當該期のモンゴルの狀況を確認する必要がある。

そこで注目されるのが、一六一—一七世紀のモンゴルにおける、ヒヤ*Kiy-a*・⁽⁴⁹⁾「恰」の稱號をもつ有力者の存在である。ヒヤとは、モンゴル王公管下の執政・斷事官というべき役職であるといひ、なかでも著名なのが、トゥメト部のアルタン

＝ハーン Altan Qayan 王家の下で活躍したヒヤ＝タイジ (Kiy-a Taiji 恰臺吉：一五三〇頃—九一)とダユン＝ヒヤ (Dayun Kiy-a 歹言恰)である。⁽⁵⁰⁾ヒヤ＝タイジは非チンギス家の出身で、アルタンの義子となつてこの稱號を賜り、側近として活躍したという。また、ダユン＝ヒヤはアルタン晩年の妃として著名な三娘子配下の「酋首」として明にも知られ、一五七五(萬曆三)年にはダライ＝ラマ三世招請の使者を務めた重臣である。同じ頃、オルドス部ではウイエン＝ヒヤ＝タブナ(威正恰把不能)なる人物が有力であつたといひ、さらに遠くオイラト諸部でもエセルベイ＝ヒヤ Eselbei Kiy-a なる人物が知られる。⁽⁵¹⁾

一七世紀のマンジュ側史料においても、モンゴル各部においてヒヤの稱號をもつ重臣が多數確認できる。まず最重要の同盟國であるホルチン部において、サンガルジャイ＝ヒヤ Sangarjai Hiy-a なる人物の活動が詳しく確認される。⁽⁵²⁾この人物は、公主降嫁の迎えや問責使ソニンらへの應對など、ホルチン部長オーバの側近として活動していた。また、同じく隣接する勢力として關係の深かつた内ハルハ五部においても、例えば一六二二(天命七)年二月、前年に内屬したバヨト部諸首長への賜與の際に家臣として「第一等の jarguci, hiya」が對象に擧がつており、ジャルト部でも「賈兒古赤」と「恰」⁽⁵³⁾が筆頭格の重臣だつたことは明側史料からも知られる。さらに大元帝室正系のチャハル＝ハーン家においても、『初集』に蒙古旗人として「阿爾沙護墨爾根 Arshu Mergen、初め察哈爾汗の轄 Cakar Han i hiya 爲り」との記事があり、⁽⁵⁴⁾ヒヤが存在したことは明らかである。一六三五(天聰九)年正月二日、來投したチャハル部の諸將に對し賜與を行なう際、「衆大臣・タイジ・タブナン・ヒヤら」とあつて以下多數のヒヤの名が擧がつており、ヒヤ集團がチャハル重臣層の一角をなしていたことがわかる。⁽⁵⁵⁾そのほか外ハルハ・オルドスまで含むモンゴル諸部の使者・隨從にヒヤの稱號をもつ者は枚舉に遑がない。

以上の如く、一六—一七世紀モンゴルにおいては、チンギス家王族の側近を務める重臣として Kiy-a の稱號をもつ者が廣汎に存し、(1)首長・領主層に屬し、(2)近侍・警護から出任にまであたる存在であつたのである。

ジュシエン諸部とモンゴルとの接觸・交流は一四世紀後半のモンゴルの北歸後も密であり（『劉一九九四』）、特にジュシエン諸部で國家形成の進行する一六世紀中葉以降非常に盛んとなるので、この頃以降にもたらされた可能性は多分にある。その時期としては、(1)一六世紀中葉、東モンゴルに隣接する地域でフルン四國が形成された時期、(2)チャハル部・内ハルハ部が活動を活発化させて接觸の増加した一五七〇—一八〇年代、(3)ヌルハチ政權が確立しモンゴル諸部と通交を開始した一五九〇年代以降、が考えられる。

このうち(1)が成り立つためにはヌルハチ麾下以外のジュシエン諸勢力においてヒヤ號が確認されねばならないが、フルン四國やマンジュ統一戦期の諸勢力にはバトゥルはじめモンゴル起源の稱號は遍在しているもののヒヤの稱は管見の限り見当たらないため、(1)よりは(2)(3)の蓋然性が高いといつてよからう。一六世紀半ばにアルタンの壓迫で東遷したチャハル部は、一五六〇—一八〇年代にトゥメン＝ハーン *Tumen Qayan* のもと大いに勢力を盛り返し、東方ではマンジュ諸勢力を被管の状態におくほどであった（『和田一九五八、五四七—五五〇頁』）。(2)の可能性は、この時代を指す。他方(3)であるが、清史料によれば、ヌルハチとモンゴル諸勢力との接觸は一五九三（萬曆二十一年）のグレ山の戦に始まる。このときホルチン部はフルン連合軍に加わって敗退し、その結果翌年に早くもホルチン左翼のミンガン *Minggan* らが遣使して通好し、一六〇五年にはバヨト部首長エンゲデル *Engedel* が自ら來朝、翌年ヌルハチにハン號を上った。¹⁵⁹編年史料におけるヒヤの初出が一六〇七年であることは——『舊檔』にそれ以前の記事が缺失しているとしても——、一五九〇年代以降のモンゴルとの接觸の中で新たに導入されたものであることを示唆するものかもしれない。しかし、清史料は(2)関連の史實を諱んで、對モンゴル關係がグレの戦勝に始まるかのように記しているため、(2)(3)何れと決することまではできない。

以上の考察を総合すると、現時点では、ジュシエン—マンジュ社會にはモンゴル時代の遺制として（その基底に前金以來の要素がある可能性もある）ケシクの・ネケルの・トルカの制度・慣行が傳存しており、これを基盤として、さらに一六世紀後半に、當時モンゴル諸部における首長の近侍・側近であつたヒヤの職位・呼稱が導入された、という過程を想定する

ことができる。いずれにせよ、かかる組織技術が權力編成の中樞に存している以上、これが中央ユーラシア國家の系譜上に位置するものであることは搖るがない事實である。

結 語

マンジュー大清國^{グルン}の中樞をなす八旗制は一般に、ニルからグサに至る整然とした階層組織體系か、ハンノ皇帝をもその一人とする旗王の並立・連合體制かの何れかで説明される。これらは何れも正しいが、それゆえにまた、精緻な組織と不安定な權力構造というダブル・イメージを併存させてきたのも否み難い事實である。では、これらを統合する求心構造は何であろうか。かかる關心から權力の中樞たる君主の身邊を見直したとき、就中國家形成過程に溯ったとき、親衛・側近集團の存在が浮かび上がってくる。その中核をなすのがヒヤ、後の侍衛であつた。序論で掲げた三つの課題に即していうならば、それは以下の如くまとめられる。

第一に、ヌルハチの親衛集團の形成過程とその内實。第一の時期はフェアラ築城以前の時代であり、中小アンバンにすぎなかつたこの時代は、まだ戰場における前鋒・親衛や組織における祕書・警護・家政の區別はなく、年次の確かな史料による限りその多くは家僕の奉仕の一環であり、ヒヤの稱もまだ見出せない。第二の時期はフェアラ時代で、なおヒヤ號は明確には確認されないものの、國勢の伸長に伴つて、家僕の兼務ではない領主・首長層の隨從が明らかにみられるようになる。また宮中で^の養育・養成が既に行なわれており、後年の定制の祖型が出来上がつていた。續くハダ併合・ヘトアラ遷都以降の第三期に至りはじめてヒヤの號が史料上確認され、ヒヤ制が名實共に確立したといえる。

第二に、職務と特徴。ヒヤの主たる職務は、①常時ハンに近侍すること、②平時の宮殿警備、③ハンの側近として委ねられるさまざまな用務、であり、後年の侍衛の職務はすでにヌルハチ時代に淵源していた。またその特徴は、古參・新參のあらゆる舊首長層・領主層とその子弟を編入することにより、それらをヌルハチを主君とし父とする從屬關係下に位置

づけていくという機能にあった。その意味でヒヤは、現在・將來の人材プール・養成機關であり、かつ優遇・恩遇の側面とともに人質・再教育の側面をも有していた。このような關係下にあるヒヤは、また君主のグチュとして把握される存在でもあった〔増井二〇二〕。

ただし、ヒヤは閉鎖的・排他的な集團を形成したわけではなく、厳格な組織體系や整備された養成制度・施設を保有したわけでもない。ヒヤは、君主の警護を本來の使命としつつも、むしろ親臣の稱號・身分というべき性格を有していたのであり、その本質が側近集團という點に存したことに留意せねばならない。この柔軟さが、八旗制度の「固い」組織體系と表裏をなして、内部の統合と對外的擴大とに有効に機能したのである。

第三に、淵源について。ヒヤ制の起源は俄には辿り難いが、その制度・特徴がモンゴル時代のケシクに酷似していること、制度・用語がモンゴル時代、および同時期のモンゴル諸勢力よりそれぞれ移入された可能性を想定しうること、が少なくとも指摘できる。

以上から、ヒヤこそ八旗制下の求心構造の核心をなし、さらには人間組織としての國家の膨張・展開の原動力となつたことが結論できるであろう。そもそも王朝・國家がつまるところ人間集團・人間組織である限り、その頂點に位置する君主を取り巻く集團が普遍的に存在するものであり、それゆえその組織法にこそ、各王朝・國家の特徴が集約的に表出されるであろう。⁽⁵⁷⁾ マンジュにおけるそれが、ネケルに比しうるグチュ關係を根底におく、ケシクに準うべきヒヤ制であつたということは、この國家の本質を示すものにほかならない。私は、草創期のマンジュ（ガルスン）大清國において、モンゴル帝國に代表される中央ユーラシアの國家編成原理が貫かれていることを主張したが（杉山二〇〇一a、三〇頁；二〇〇一b、七六―七七頁）、本稿で検討したヒヤ制こそ、グチュと表裏一體のものとしてその核をなすことができる。

ひるがえって、杉山正明氏が、ケシク制を指して「じつは、こうした存在は、オスマン朝のイエニ・チェリ、清朝の包衣（ボイ）にもみとめられる。ひろく、モンゴル帝國以後の中央ユーラシアの諸國家、諸集團をみわたすと、そこには、ケシク

に似た人間組織がみてとれる。おそらくは、その直接の由來はモンゴルにある⁽⁵⁸⁾と述べていることは注目に値しよう。氏は包衣すなわち家政機關を擧げているが、ヒヤコそよりふさわしいものであることは、もはやいうまでもあるまい。かかる展望をふまえたとき、モンゴル帝國のケシクのみならず、オスマン帝國のカプ＝クル *Kapı Kulu*、サファヴィー朝のコルチ・ゴラーム *gholām* など⁽⁵⁹⁾を視野に入ってくるであろう。

ただし、ケシクとヒヤには、同時に重要な相違點も存し、そしてそれが兩帝國の政治體制とその後の歴史展開に、看過すべからざる違いを齎したのである。すなわち、遊牧・分住と城居・集住という、生活形態の相違がもたらす組織の差違である。遊牧のために空間的に分住せざるをえないモンゴルにおいては、君主の身邊に隨侍しうるのは移動を共にするケシクであり、これがそのまま大カアン直屬の親衛隊であると同時に帝國の中央政府としても機能していた。⁽⁶⁰⁾これに對しマジンジュにおいては、固定家屋で定住生活を送るという社會の特徴と集住政策のために、君主の身邊に仕える者は親衛隊すなわちヒヤとは限らなかった。ケシクと違って、君主の側近業務は親衛隊(ヒヤ)・書記局(バクシ)・家政機關(ボーイ)の三者が分掌しており、やがて入關に伴い文官系統の側近・顧問が進出してくる素地ともなるのである。

最後に今後の課題を述べておく。第一に、親衛・親軍としての研究。ヌルハチ時代のヒヤ制の實證研究のさらなる深化と、ホンタイジ時代以降のヒヤ制の制度整備・展開を跡づけることが次なる課題となる。また、本稿で論じなかったバヤラ制との關係も究明せねばならない。第二に、側近集團としての研究。ヒヤ・侍衛をかく捉えるならば、書記局としてのバクシ・文官組織、家政機關としての包衣・内務府と鼎立するものとして把握できる。かかる視點から、これら三組織を有機的に連關させて検討を進めねばならない。また、旗王もヒヤを有していたことから窺えるように、この觀點は、ハン・皇帝以外の旗王權力の解明にも適用できるであろう。下五旗諸王を中心にこの問題の解明を進める鈴木眞氏の一連の研究が、その際大いに示唆に富む(鈴木眞二〇〇一a・b・c)。第三に、人間集團としての特質・メカニズムの研究。特にヒヤ制・八旗制における非マジンジュ出自者の存在が検討の課題となろう。一面で質子軍たるケシクには服屬諸勢力から多

種多様な人々がリクルートされていたが、これはマンジュにおいても當てはまるのである。

これら各方面からの検討を進め、さらにこれまで別稿（杉山一九九八・二〇〇一 a・b）で論じてきた八旗各旗の構成の復元・分析と對比・検討を續けることで、八旗制の内實をより多面的に解き明かすことができるであろう。そしてそれは、勃興期マンジュ―後金國のみならず、ユーラシア東方における最大最後の巨大帝國としての大清帝國の中樞に薄ることにはかならないのである。

凡例：滿洲語原語を示す際は、當該語の後に續けてローマ字轉寫を掲げ、必要に応じて（ ）で漢字表記を示す。

頻繁に参照する文献は、末尾の文献目録に基づいて引用する。著書に再録されている場合は初出年で記し、引用頁数は著書に據った。なお、副題は省略した。

註

- (1) Doerfer, G., *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, Bd. 1, Franz Steiner Vlg., 1963, p. 445 ; Rozycki, W., *Mongol Elements in Manchu*, Indiana University, 1994, pp. 106-107.
- (2) 各旗に分封された帝室諸王のうち、一旗全體を管する最高位の王族をホシヨイ＝ベイレ *hosoi beile*（和碩貝勒）、その他をタイジ *taiji* といい、これらはいずれもベイレ（王・領主の意）の身分を有していた〔神田信夫一九五八〕。以下、これらを總稱して旗王と呼ぶ。
- (3) 乾隆『大清會典』卷九四・九八・光緒『大清會典』卷八一・八七ほか。また、後註（4）所掲文献参照。
- (4) 入關後における制度の概要は以下の諸研究を参照。坂野

正高『近代中國政治外交史』東京大學出版會、一九七三、三六一―三七頁。常江『清代侍衛制度』『社會科學輯刊』一九八八―三、八五―九一頁。李鵬年ほか『清代中央國家機關概述』紫禁城出版社、一九八九、一三〇―一三三頁。秦國經『清代宮廷的警衛制度』『清代宮史探微』紫禁城出版社、一九九一、三〇八―三五頁（初出一九九〇）。毛佩琦・陳金陵『明清行政管理制度』山西人民出版社、一九九五、一五一―一五四頁。張德澤『清代國家機關考略』（修訂本）『學苑出版社』、二〇〇一、八六―八八頁（初版一九八一）。また、近年盛んなアメリカの諸研究でも、宮廷機構または八旗制度の一環として制度的に整理を加えるのみである。Cf. Rawski, E. S., *The Last Emperors : A Social*

History of Qing Imperial Institutions. University of California Press, 1998. pp.82-87; Elliott, M. C., *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China*. Stanford U.P., 2001. p. 81.

- (5) なお、侍衛の役割の重要性については、夙く宮崎市定氏が言及している。「雍正帝」「宮崎市定全集一四」岩波書店、一九九一、六七―六八頁（初出：岩波新書、一九五〇）。
- (6) 各種あるヌルハチの實録については、「松村潤二〇〇一」I 参照。Cf. 同書拙評、『滿族史研究』一、二〇〇二、一三四―一四三頁。
- (7) 同檔冊の譯稱は未だ定まらないので、本稿ではかく假稱する。Cf. 註(6) 前掲拙評、一三六頁。同檔冊については、石橋崇雄「清初入關前の無圈點滿洲文檔案」先ゲンギエン・ハン賢行典例』をめぐって』『東洋史研究』五八―三、一九九九、五二―八三頁、および「松村二〇〇一」IV 参照。
- (8) 以下兩書からの引用は、ローマ字表記は滿文本により、漢文本については、『初集』は點校本の冊・頁數、『通譜』は影印本の頁數を附記する。また、『續集』は影印本の冊・頁數を附記する。
- (9) 引用史料中、() は滿洲語原語の提示、(<) は原註・割註、「」は引用者による補足である。
- (10) 『滿洲實錄』卷三、丁未年條（一八八一―一九七頁、および七四一頁、註八三）。『舊檔』萬曆三五年三月條（第一冊、三・一〇―一頁／『老檔』太祖一、一―四頁）。

- (11) 周遠廉『清朝開國史研究』遼寧人民出版社、一九八一、一九頁。祁美琴『清代内務府』中國人民大學出版社、一九九八、三一頁。

- (12) 表中の七人のうち傳記の存するのはローハン（表2 參照）と、身邊隨侍の例に當てはまらないジャイサ（『初集』卷二二三）のみであり、ローハンの顯彰も、入關後の追贈にすぎない。なお、ヤムブルについては「増井寛也一九九六、二〇三頁、註四七・四八」も參照。

- (13) 今西春秋「JUSEN 國域考」『東方學紀要』二、一九九七、一三・一五―一六・二一―二三頁。以下、地名の考證は基本的に同論文により、註記を省略する。

- (14) 「江嶋壽雄一九四四、四四一頁、註五」、および増井「クルカ^{Kulka}とクヤラ^{Kayala}」『立命館文學』五一四、一九八九、二八頁。

- (15) 『初集』卷九（第一冊、一五八頁）：『續集』卷一五（第六四冊、五一五頁）。『通譜』卷一三呼訥赫地方伊爾根覺羅氏「納齊布」傳（一九四頁）。

- (16) 『滿洲實錄』卷一、戊子年四月條（一一〇―一一三頁）。
- (17) ヌルハチの本來の姓氏はギョロ姓であり、著名な冠稱アイシン Aisin（金の意）は後に加えられたものである。神田「愛新覺羅考」『東方學』八〇、一九九〇、一―三頁。
- (18) 『續集』卷一五六「扈爾漢」傳（第六六六冊、五八六頁）。

- (19) 『初集』卷一六二「西喇巴札爾固齊」傳（第六冊、四〇三〇頁）；『續集』卷一七一「博爾晉」傳（第六六七冊、九

六頁)。このエピソードは『常・李一九九三、一〇〇頁』にも引かれるが、出典の明示はなく、考證もなされていない。

- (20) 『滿洲實錄』卷二、癸未年六月條(一二八一—一二三三頁)。
 『初集』卷一六七「イムンフツコ領翁科洛巴イムンフツコ圖魯安費揚武」傳(第六冊、四一—八頁)。

- (21) 『舊檔』「ムクシタタン表」(第五冊、二二七六頁)。
 『老檔』太祖3、一一九九—一二〇〇頁、その他の例は『老檔』太祖3、人名索引参照。系譜は『通譜』卷二三「ハダダ達地方納喇氏「ヨラン約蘭 Yolan」傳(二三三頁)。
 『初集』卷一四七「ソニバクシ索尼巴克什」傳(第六冊、三七八四頁)。

- (22) 『舊檔』萬曆四三年二月條(第一冊、一三二頁)。
 『老檔』太祖1、五七頁。『舊檔』天命元年元日條(第一冊、三三八頁)。
 『老檔』太祖1、六七頁)。

- (23) 『舊檔』天命六年九月八日條(第三冊、一一七四—七五頁)。
 『老檔』太祖1、三八〇—三八二頁)。

- (24) ただし、石橋氏の論考はバヤラ制を専論したものであるため、ヒヤについては詳しくは觸れていない。バヤラとヒヤとの関係、その組織體系などの諸問題の検討は他日を期すこととしたい。

- (25) 『初集』卷一五三「吳拜」傳(第六冊、三八七九頁)。
 一六二六年四月のナンヌク Nanguk 攻滅と同年九月のホ
 ンタイジ即位の間に記事がある。

- (26) 『舊檔』天聰二年十二月一日條(第六冊、二八四七頁)。

『老檔』太宗1、一八一頁)。

- (27) 『舊檔』天命三年四月條(第一冊、三六七頁)。
 『老檔』太祖1、九七頁)。

- (28) なお、エイドウ(ないし五大臣)も「ダラハ達拉哈轄」dalaha ビロ(筆頭ヒヤ)との稱を有したという記録もあるが、詳細は明らかではない「ツヅ増井二〇〇一、六四頁、註一〇六」。

- (29) 『舊檔』天命六年五月二三日條(第二冊、六七六頁)。
 『老檔』太祖1、三三二頁)。

- (30) 『初集』卷一五三「吳拜」傳(第六冊、三八七八頁)。
 『通譜』卷四「吳拜」傳(八六頁)。

- (31) 『家譜』の「額宜都」下に「女適正白旗滿洲原任一等子都統吳拜」とある。

- (32) ヒヤ集團の性格については、「ツヅ増井二〇〇一、五三頁」でも同様の指摘がある。また「チン陳文石一九七七、六二四—六二五頁」も参照。

- (33) 『舊檔』「ワウ黃字檔」鑲黃旗勅書(第四冊、一九六五頁)。
 〇「チン細谷良夫「マン滿文原檔」「黃字檔」について」『東洋史研究』四九—四、一九九一、二九—三一・四一頁。

- (34) マンジュ社會における人質の慣習については、「カニ河内良弘一九五九、二〇四—二〇七頁」参照。

- (35) このことについては別稿で詳しく論じる豫定である。

- (36) 『初集』卷二〇「アキ葉中額」傳(第八冊、五〇三二頁)。

- (37) 『初集』卷一五〇「シ希爾根」傳(第六冊、三八二二頁)。

- (38) 旗王のヒヤについては、稿を改めて論じる豫定である。

- (39) なお、以下の小結および第三節1の論旨は、序論に述べ

た如く「増井二〇〇一、特に五一—五四頁」とも重なる部分が多い。あわせ参照されたい。

- (41) 『舊檔』天命十年五月「四日條（第四冊、一八九〇頁／『老檔』太祖3、九七三頁）。

- (42) 明の侍衛制については、『明史』卷八九兵志「侍衛上直軍」、および山崎清一「明代兵制の研究（一）」『歴史學研究』九三、一九四一、二二—二三頁、王天有『明代國家機構研究』北京大學出版社、一九九二、一三五頁。

- (43) 例えば宿衛・質子の制としては、特に以下が参考になる。増淵龍夫「戰國官僚制の一性格」『新版 中國古代の國家と社會』岩波書店、一九九六、二三五—二六五頁（初出一九五五／一九五九補）、および池田溫「唐朝處遇外族官制略考」唐代史研究會編『隋唐帝國と東アジア世界』汲古書院、一九七九、二五一—二七八頁。Yang, Liensheng, "Hostages in Chinese History," *HJAS*, 15-3/4, 1952, pp. 507-521.

- (44) なお、元代において漢語で侍衛と稱されたのはケシクではなく漢人主體の侍衛親軍であるが、清のヒヤール侍衛はこれではなく、ケシクに對應するとみてよいであろう。

- (45) 「護一九五二a・b」の再評價、およびフレッジ・ウルスにおけるネケルについては、志茂碩敏「モンゴル帝國史研究序説」東京大學出版會、一九九五、第五部参照。

- (46) 『舊檔』萬曆四十一年三月條（第一冊、六八一—七〇頁／『老檔』太祖1、三三—三三頁）「三田村一九六三—六四、一二四頁・今西一九七〇、五頁・増井二〇〇一、五一—五

二頁」。

- (47) 周知の如く、一五世紀以降のモンゴルでは大きな政治・社會的變化が生じており、どの程度帝國時代の遺制が繼承されたかについてはなお不明の點が少なくない。以下は一試験であり、諸賢のご批正・ご教示を乞うものである。

- (48) この點に關しては、「清水和裕一九九九、特に二三—四頁」の議論より多くの示唆を得た。

- (49) 達力扎布『明代漠南蒙古歷史研究』內蒙古文化出版社、一九九八、一六四—一六五頁、および「永井匠一九九九、四八頁、註九」参照。

- (50) ヒヤルタイジについては「永井一九九九」、および「同、四七—四八頁、註一・五」所掲文獻参照。またダユン「ヒヤ」については以下を見よ。森川哲雄『アルタン・ハーン傳』の研究』福岡、一九八七、一三八—一三九頁、§一五九、註一；吉田順一ほか『アルタン・ハーン傳』譯注』風間書房、一九九八、三三三—三三四頁、§一六二、註一。

- (51) 井上治『ホトクタイ・セチェン・ホンタイジの研究』風間書房、二〇〇二、五三・七三—七六頁。

- (52) この人物の活動は『舊檔』に頻出する。『老檔』太宗4、人名索引参照。

- (53) 『舊檔』天命七年二月條（第二冊、一〇三三頁／『老檔』太祖2、五四三頁）。馮瑗「開原圖説」卷下（玄覽堂叢書影印本、四六六—四七二頁）。Cf. 増井「明末の海西女直と貢勅制」『立命館文學』五七九、二〇〇三、六七頁。

- (54) 『初集』卷一七一「郭爾欽^{ゴルチン}」傳（第六冊、四一七八頁）。

(55) 『舊檔』天聰九年正月二二日條(『舊滿洲檔——天聰九年』一、東洋文庫、一九七二、一八一—三頁)、また「和田清一九五八、六六一頁、註三七」参照。

(56) 『滿洲實錄』卷二、甲午年條(一五〇—一五一頁)・卷三、乙巳年・丙午條(一八六—一八七頁)。ホルチン・内ハルハ諸部との關係については、「楠木賢道一九九三・二〇〇〇」参照。

(57) 清についていえば、この後のホンタイジ時代の状況に基づいた「楠木二〇〇〇、特に二七—三〇頁」の指摘を見よ。

(58) 『大モンゴルの世界』角川書店、一九九二、八三頁。

(59) 以下の諸研究を参照した。鈴木董『オスマン帝國の權力とエリート』東京大學出版會、一九九三、第I部。同「オ

スマン帝國とイスラム世界」東京大學出版會、一九九七、第II部。羽田正「コルチ考」『史林』六七—三、一九八四、一—三頁。同「シャー・アッパースの改革とコルチ」『西南アジア研究』二三、一九八四、二六—四六頁。前田弘毅「サファヴィー朝期イランにおける國家體制の革新」『史學雜誌』一〇七—一二、一九九八、一—三八頁。

(60) 前田直典「元朝行省の成立過程」『元朝史の研究』東京大學出版會、一九七三、一九四—一九五頁、註一七(初出一九四五)、および「本田實信一九五三、一三—一七頁」。

(61) 「松浦一九八四、第一章」、および杜家驥「清代宗室分封制述論」『社會科學輯刊』一九九一—四、九〇—九五頁。

文獻目録(五十音順)

阿南 惟敬 一九六七「清初固山額眞年表考」阿南一九八〇、二四三—二六七頁(原載『防衛大學校紀要』一五)

一九七二「清初バヤラ新考」阿南一九八〇、四九五—五三七頁(原載『史學雜誌』八〇—四)

一九八〇「清初軍事史論考」甲陽書房。

石橋 崇雄 一九八一「清初バヤラの形成過程」『中國近代史研究』一、三一—四三頁。

一九八八「清初八旗制下における職官名の漢字表記改稱時期」『中國近代史研究』六、二二—三九頁。

二〇〇〇「無圈點滿洲文檔案『先ゲンギェン』ハン賢行典例・全十七條」『國史館史學』八、(横組)一—四九頁。

今西 春秋 一九七〇『Soliと卓衣』「朝鮮學報」五六、(横組)四—六頁([MANTU]雜記3)所收)

江嶋 壽雄 一九四四「明末滿洲に於けるガシヤンの諸形態」『明代清初の女直史研究』中國書店、一九九九、四〇七—四四三頁(原載「史淵」三三)

岡田 英弘 一九九四「清初の滿洲文化におけるモンゴルの要素」『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院、一九—三三頁。

鴛淵 一 一九三八「清初擺牙喇考」『稻葉博士還曆記念滿鮮史論叢』稻葉博士還曆記念會、二二—二六八頁。

河内 良弘 一九五九「李朝初期の女眞人侍衛」『明代女眞史の研究』同朋舎出版、一九九二、一七一—二〇頁（原載『朝鮮學報』一四）

神田 信夫 一九五八「清初の貝勒について」『東洋學報』四〇—四、一一—三頁。

一九六〇「清初の文館について」『東洋史研究』一九—三、三六—五二頁。

楠木 賢道 一九九九「清初、入關前におけるハン・皇帝とホルチン部首長層の婚姻關係」『内陸アジア史研究』一四、四五—六三頁。

二〇〇〇「天聰五年大凌河攻城戦からみたアイシン國政權の構造」『東洋史研究』五九—三、一一—三四頁。

佐伯 富 一九六八「清代の侍衛について」『中國史研究 第二』東洋史研究會、一九七一、三三—三四八頁（原載『東洋史研究』二七—二）

清水 和裕 一九九九「マムルークとグラーム」『岩波講座世界歴史一〇』（新版）岩波書店、二〇〇一—二四五頁。

二〇〇〇「グラームの諸相」『西南アジア研究』五二、三八—五八頁。

蕭 啓慶 一九七三「元代的宿衛制度」『元代史新探』新文豐出版公司、一九八三、五九—一一頁（原載『邊政研究所年報』四）

常江・李理 一九九三『清宮侍衛』遼寧大學出版社。

杉山 清彦 一九九八「清初正藍旗考」『史學雜誌』一〇七—七、一一—三八頁。

二〇〇一 a 「清初八旗における最有力軍團」『内陸アジア史研究』一六、一二—三三七頁。

二〇〇一 b 「八旗旗王制の成立」『東洋學報』八三—一、五三—八三頁。

二〇〇一 a 「雍正帝による旗王統制と八旗改革」『史境』四二、四六—六四頁。

二〇〇一 b 「雍正帝と藩邸舊人」『社會文化史學』四二、一八—四一頁。

二〇〇一 c 「雍正初年の戸部銀庫虧空事件からみた清朝支配構造的特質」『東洋學報』八三—三、六三—九二頁。

陳 文石 一九七七「清代的侍衛」『明清政治社會史論』下冊、學生書局、一九九一、六三—六四九頁（原載『食貨月刊復刊』七—六）

永井 匠 一九九九「恰臺吉の事績」『史滴』二二、三四—四八頁。

本田 實信 一九五二「チンギス・ハンの十三翼」本田一九九一、一一—六頁（原載『東方學』四）

一九五三「チンギス・ハンの千戸制」本田一九九一、一七—四〇頁（原載『史學雜誌』六二—六）

一九九一『モンゴル時代史研究』東京大學出版會。

増井 寛也

一九九六「滿族ギョルチャ・ハラ考」『立命館文學』五四四、一七二—二〇四頁。

一九九七「明末建州女直のワンギヤ部とワンギヤ・ハラ」『東方學』九三、七二—八七頁。

一九九八「ヌルハチ勃興期の事跡補遺」『大垣女子短期大學研究紀要』四〇、四三—五五頁。

二〇〇一「グチュ Bogu 考」『立命館文學』五七二、(横組)二五一—六六頁。

松浦 茂

一九八四「天命年間の世職制度について」『東洋史研究』四二—四、一〇五—一二九頁。

一九九五「清の太祖 ヌルハチ」白帝社。

松村 潤

二〇〇一「清太祖實錄の研究」東北アジア文獻研究會。

三田村泰助

一九六二「初期滿洲八旗の成立過程」三田村一九六五、二八三—三三二頁(原載『清水博士追悼記念明代史論叢』大安)

一九六三—六四「ムクン・タタン制の研究」三田村一九六五、一〇七—一二二頁(原載『明代滿蒙史研究』京都大學文學部／『立命館文學』一二三)

一九六五「清朝前史の研究」東洋史研究會。

一九五一「チンギス汗帝國成立の過程」村上一九九三、一三九—一七二頁(原載『歴史學研究』一五四)

一九六二「モンゴル朝治下の封邑制の起源」村上一九九三、一七三—二〇六頁(原載『東洋學報』四四—一三)

村上 正二

一九九三「モンゴル帝國史研究」風間書房。

一九五二a「Nokor 考序説」『東方學』五、五六—六八頁。

護 雅夫

一九五二b「Nokor 考」『史學雜誌』六一—八、一一—二七頁。

箭内 互

一九一六「元朝怯薛考」『蒙古史研究』刀江書院、一九三〇、二二—二六二頁(原載『東洋學報』六一—三)

劉 小萌

一九九四「滿族肇興時期所受蒙古文化的影响」『滿族的社會與生活』北京圖書出版社、一九九八、三七五—三八六頁

和 田 清

(原載『社會科學戰線』一九九四—一六)

一九五二「清の太祖の顧問雙正陸」『東亞史研究(滿洲篇)』東洋文庫、一九五五、六三七—六四九頁(原載『東洋學報』三五—一)

一九五八「察哈爾部の變遷」『東亞史研究(蒙古篇)』東洋文庫、一九五九、五二—六六六頁(原載『東洋學報』四—一・一二)

〔附記〕 本稿の論旨は、平成一四年七月に第三九回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ學會）において行なった口頭發表「清初侍衛考」の一部に當たる。席上種々の助言を賜った諸氏に謝意を表するものである。なお、本稿は平成一四年度文部省科學研究費補助金（特別研究員獎勵費）による研究成果の一部である。

〔補記〕 本稿脱稿後、内田直文「清朝康熙年間における内廷侍衛の形成」『歴史學研究』七七四、二〇〇三、二九—四五頁、が發表された。康熙年間と題するものの、實際に扱う範圍は順治—康熙初の一六五〇—一六〇年代であり、同論文には本稿、およびそれに先立つ口頭報告「清初侍衛考」（附記参照）と重なる部分が多いが、本稿ではコメントすることができなかった。一點のみ言及しておくとして、侍衛が「北方民族的な制度の一つとして知られ」、ヌルハチ時代から「ハンの側近集團として存在した」（二九頁）と通説的前提として氏が述べる内容は、私は、増井氏が先驅的に指摘し、本稿によってはじめて論證されたと考えている。

highest-ranking deity of the afterlife, a celestial emperor. The relatives of the deceased would seek to have the envoy of the Celestial Thearch drive off the demon who was responsible for epidemics and who clung to the deceased and also to implore it not to attack the living. In such cases the phrase “the living and the dead shall each travel a different road” was emphasized. However, considering the reality of widespread epidemics 注病 of the Jian-an era of the Later-Han, the fear of epidemics was surely extreme, and the phrasing “*jiezhu*” 解注 was often employed, indicating that people sought thereby to drive off the epidemics.

Nevertheless, when it comes to the tickets from tombs and bills of property sales of the Liu-Song and Southern Qi from around the fifth century, in place of the Celestial Thearch of the Later Han, there is found the deification of Taishang Laojun 太上老君, written together with the Wujidadao deity 無極大道 (神), which was elevated to the same level of divinity and which played the same role as Taishang Laojun. Furthermore, in place of the envoy of the Celestial Thearch, the divinity call Nüqing 女青 also appeared. In addition, among these excavated materials there is also found the phrase “statutes of the mystical capital” 玄都律文. These findings will surely be a great assistance in interpreting the contents and the period of creation of Daoist texts such as the *Scripture of the Inner Explanations of the Three Heavens* 三天內解, the *Demon Statues of the Nüqing* 女青鬼律, and the *Text of the Statutes of the Mystical Capital* 玄都律文.

THE *HIYA* SYSTEM IN THE REIGN OF NURHAČI: AN INTRODUCTION TO A RESEARCH OF THE IMPERIAL GUARD IN THE EARLY MANCHU-QING EMPIRE

SUGIYAMA Kiyohiko

The Manchu Khanate (*manju gurun*), established by Nurhači or Emperor Taizu, was organized on the system of the Eight Banners (*jakūn gūsa*), which was continued to serve as the structure of the ruling elite of Qing 清 Empire after conquest of China. The structure of the Eight Banners is generally seen as either a pyramid-shaped hierarchy or a federation of banner princes (*beile*), including the khan, or emperor. However, if viewed from the perspective of the vicinity of the rulers, particularly if observing the formation of the state, the presence of a group of attendants or bodyguards comes into focus. The core of these was the imperial

guard, known as *hiya*, and later *shiwei* 侍衛.

Firstly, I have considered the process of the formation of the *hiya* system. The first period is of small and mid-sized chieftain prior to 1587. In this period the duties of groups of subjects were not yet diversified, therefore many of attendants were household servant, and the word *hiya* was not yet seen. The second period was that of the foundation of the first capital Fe Ala, after 1587, when accompanying the extension of state power, subjects of the chieftain class were assigned to serve as personal guards, and the guardsmen began to be trained within the palace. The third period was that of the annexation of Hada and the transfer of the capital to Hetu Ala in which the existence of the appellation *hiya* can be confirmed, and during which the *hiya* system was firmly established.

Secondly, I have considered their duties and special character. The chief duties of the *hiya* were 1) serve as escorts to the khan, 2) guard the palace on an everyday bases, and 3) various services as personal associates of the khan. The duties of the later *shiwei* were thus inherent in the *hiya* of the age of Nurhači. The essence of the *hiya* was in it being a group of personal attendants on the monarch. In addition to the basic mission of guarding the monarch, they were referred to as the personal associates of the monarch. Their most important function resided in the placement of all former chieftains and their offspring as subjects in the hierarchy in which Nurhači was father and master. In this sense, the *hiya* was an organization that reared the present and future talent pool and that also had an aspect of hostage and re-educating personnel along with rewards and special treatment. The *hiya* was in this relationship also the comrade (*gucu*) of the master.

Thirdly, I have considered the origin of the system. The special character of the *hiya* system is extremely similar to that of the *kešig* system of the Mongol Empire. Their customary duties, which resembled those of the *kešig*, or *nökür*-like system, could be carried on as a vestige of the Mongol period. One can image a process of adoption in which, on the basis of this vestigial system, the position and appellation *hiya* as the aides to the Mongol chieftains was introduced from the Mongol tribes in the second half of the 16th century.

Judging from the above, it may be concluded that the *hiya* was an personnel organization corresponding to the *kešig* of the Mongol Empire, functioned as the core of centripetal structure under the Eight Banners. The initial period of the Manchu Khanate or Qing Empire maintained the Central Eurasian principle of national organization represented by the Mongol Empire, and the *hiya* system together with the *gucu* relationship formed its core. As regards the *hiya* and other organizations of personal associates of the Manchu rulers, it should be recognized

that it had much more in common with the *kešig* of the Mongol Empire, the *kapı kulu* of the Ottoman Empire, and the *gholām* of the Safavid Dynasty rather than those of Ming China.